

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月2日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21330040

研究課題名（和文）ネオリベリズムとグローバル・ガバナンスの変容に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Studies on the Transformation of Neoliberalism and Global Governance

## 研究代表者

土佐 弘之（TOSA HIROYUKI）

神戸大学・大学院国際協力研究科・教授

研究者番号：70180148

## 研究成果の概要（和文）：

ネオリベラルな統治形態のグローバルな拡大・浸透は、グローバル・ガバナンスそのものに、さまざまな新しい現象を引き起こしている。その動態を明らかにするべく、金融ガバナンス、人の移動に関するガバナンス、HIV/AIDSに関するヘルス・ガバナンスなど、いくつかの 이슈に焦点を当てながら多角的な検討を行った。その成果については、学会報告をしたうえ、それぞれ学術雑誌論文や単行本所収の論文として公刊し、そのいくつかをまとめたものとして、単著『野生のデモクラシー』（青土社、2012）として公刊した。

## 研究成果の概要（英文）：

Expanding and deepening of neo-liberal global governmentality is now bring about the new phenomena. In order to clarify it, we have examined the transformation of the global governance by focusing on several cases such as financial governance, migratory governance, and health governance. Academic by-products of this research project are a published book of which title is *Savage Democracy* and several academic journal articles including “Anarchical Governance” (*International Political Sociology*) .

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2012年度	2,200,000	660,000	2,860,000
総計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：ネオリベリズム、ガバナンス、統治性、ラディカル・デモクラシー

## 1. 研究開始当初の背景

国際関係論の中で国際政治社会学という流れが形成されつつあり、その中には現代思想と現状分析とのインターフェースを探求するものがある。本研究は、そうした研究を

担っている海外の研究者との交流から生まれたものである。

## 2. 研究の目的

1980年代以降のネオリベラルな統治形態

のグローバルな拡大・浸透は、ガヴァナンスそのものに新しい現象を引き起こしている。例えば、さまざまな非国家主体の前景化であるが。ガヴァナンスへの異議申し立てを行い下から改革を促す対抗的主体として活躍するNGOもあれば、上からのガヴァナンスを補完するNGOもある。本研究の目的は、国家や国際機構に非国家主体を加えた形で再編されつつあるグローバル・ガヴァナンスの態様について、いくつかの事例研究を踏まえた上で、特にポスト構造主義的視角からの検討・考察を行っていき、その動態を明らかにすることである。特にグローバル金融危機後の再編過程における統治性の変容とそこにおける<支配/抵抗>の政治に焦点を当てる。

### 3. 研究の方法

研究は主として文献研究を中心に行ったが、意見交換なども兼ね、海外の研究者を招いてのワークショップを数回におよび開催したほか、そうした研究者と共同で、国際学会での報告セッションなどをもち、そこでのコメントを論文執筆などへフィードバックさせるなどして、共同研究を進めていった。以下が、その一例。

- ・ 国際ワークショップ、Anna Agathangelou ヨーク大学准教授などの報告と討論。神戸大学、2009年4月14日。
- ・ 国際ワークショップ (、David Chandler ウェスミンスター大学教授、Julien Reid キングス・カレッジ講師による報告と討論。神戸大学、2009年6月26日。
- ・ 国際学会でのセッション “The Democratic Spectral Politics of the Global Justice Movement, SGIR 7<sup>th</sup> Conference, Stockholm, 2010年9月9日
- ・ 国際ワークショップ、Siba Grobogui ジョンズホプキンス大学教授による報告と討論、大阪ハービスプラザ会議場、2011年7月9日。
- ・ 国際ワークショップ、Luiza Bialasiewicz アムステルダム大学准教授による報告と討論、大阪ハービスプラザ会議場、2011年11月18日。

### 4. 研究成果

項目5で列挙した通り、国内外の学会での報告という形で研究の途中成果を出し、加えて、そこで報告した論文の多くは学会誌などで公刊し、その一部は単著の本『野生のデモクラシー』（青土社、2012）などとして公刊した。

その中から跋文の一節を引用すると下記の通りである。些か長くなるが、そこから研究成果・内容の一端を知っていただけよう。

「グローバル金融危機を経てもなお、ネオ

リベラルな統治性は世界中を広く覆っており、それは、例えば、国際競争力強化の名の下で、または財政規律主義強化・増税の形で行政的統治・支配が強められようとしている。また巨大金融資本救済のために大量の公的資金が注ぎ込まれる一方で、多くの人々が切り捨てられ、様々な交差的抑圧の下におかれている。それに対しては、さまざまな抵抗運動が起きており、統治性の転換をはかろうとしている。しかし、レジームの閾値を越える叛乱に対してはゲバルトによる鎮圧が容赦なく推し進められ、それは例外状態の拡大をももたらしている。果たしてない「自発的」カイゼンを要請するネオリベラルなグローバル統治と外に弾き出され立ちゆかなくなった人々を例外状態に追いやる剥き出しの力が共振している。この状況を、私はアナーキカル・ガヴァナンスと呼んだことがあるが、二〇〇〇年代後半から、こうしたアナーキカル・ガヴァナンスの状況に抗する形で、新しいアナキズムを含む、プロットなきラディカル・デモクラシー（またはそのプロトタイプ）の運動が、ジャスティスを求めながら燎原の火の如く彼方此方で顕在化し、「到来する叛乱 (L' insurrection qui vient)」というスローガンが現実味を帯びてきた。

例えば、アラブ革命。二〇一〇年一二月一七日、チュニジアの中南部にある町シーディー・ブウザイドで、ムハンマド・ブーアズィーズィーという青年が一家の生計を支えるために八百屋の露店営業をしていたのを無許可販売で摘発され、それに抗議する形で市役所の前で焼身自殺した。その捨て身の抗議は、人々の口を通して伝えられていく過程で、民衆の直面している日常的な貧困・失業状態、その一方で独占的富によって潤っている腐敗した独裁政権とその取り巻き、そしてそれを支える過剰な安全保障装置（警察の横暴な

ど)に対する共有される怒りへと昇華していくことで、一連のアラブ革命を始動させる一契機となったと言われている。もちろん、焼身自殺という捨て身の行為が大きな広がりをもった叛乱につながるという保証はない。実際、二〇一二年五月二七日、中国のチベット自治区のラサでチベット人の二人が中国共産党の支配に抗議し焼身自殺をはかり、数日後、三三歳のチベット人の女性による焼身自殺を誘発したものの、厳しい報道統制・弾圧強化などもあり、これらの捨て身の抗議が大きな運動のうねりを引き起こすことはなかった事実が、その一つの証左となっている。社会運動論で言うところの政治的機会構造 (political opportunity structure) がある程度開かれていないと、認識的解放 (cognitive liberation)、つまり不正義と認識しなおす (re-framing) だけでは、レジームを転覆するには至らないということになる。逆に言えば、当該社会の上に覆い被さっている政治体制やそれを支える国際政治的なパワー・ポリティクスの構図といった、マクロの政治的機会構造が一定程度開かれていれば、現状を不正義と認識し始めた人々が次々と街頭へと繰り出し動員され、下からのレジーム・チェンジをもたらす原動力になりうる。

もちろん、レジーム・チェンジや政権交代がデモクラシーの深化をもたらすかどうかは別問題である。革命によって旧体制を崩壊させたとしても、その後、逆に行政的統治・支配が強められることは多々あったし、バックラッシュの過程で解放の夢は蜃気楼のように消えていくこともあった。後述するように、既定の制度の中でヘゲモニー闘争に終始することとデモクラシーを深化させることは、同じようである、実はいささかズレている点に留意する必要がある。とりあえず、

ここで特に強調したい点は、政治的機会構造などのマクロ的制約がある中でも、現状肯定的な認識枠組みを変えていくということ、つまり、現状を仕方がないと諦め、ただ受動的に受け止めるだけのペシミスティックな認識から、もうたくさんだ (キファーヤ) とし、現状を不正義な状態であるとする認識へ、さらには、それを自らの力で変えようという認識へと転換していくプロセスが果たす役割がとても重要であるということである。公共空間での焼身自殺というのは、ある意味で絶望的な諦めと抗議の間の不分明な閾にあると言ってよいであろうが、焼身自殺といった表象不可能な苦痛を目の前に突きつけることで、そうした認識的変革を推し進めたことは否定できないであろう。そして、そうした不正義に対する怒りを契機とする叛乱は、アラブ革命にとどまらず、タハリール広場の模倣・再現という形で、ニューヨーク、ロンドン、アテネ、マドリッドと世界中へと拡散していくことになる。こうした現象について、ジャーナリストのポール・メイソンは、その挑戦的な著書『なぜキックオフは彼方此方で起きているのか：新しいグローバル革命』の中で、「(行き詰まり感のある政治や資本主義という) 現状から逃れることはできない」というリアリズムが終焉を迎えようとしていることの現れであるとの大胆な見立てを示している。その診断がそのまま適切か否かは別としても、メイソンも指摘している重要な点は、まさにグローバル・ジャスティスという言葉を含め正義という言葉が再びファッションナブルなものになっていること背景には、不正義またはアンフェアと感じられる日常的な事象が現代社会に横溢していることであり、それが、現状を受け入れるだけのリアリズムから不正義状態を是正しようとするラディカリズムへと人々を向かわせる契

機になっているということであろう。

こうした新しい動きは、理論的な地平においても、社会的正義の概念を拒否するハイエク的なネオリベリズムに対する新たな挑戦というだけではなく、ロールズのナリベラルな正義（理）論に対する批判も含意している。まず、ハイエクであるが、彼は、『法と立法の自由（第二巻） 社会的正義の幻想』の中で、「『社会的正義』にたいする思い込みが政治的行為を支配するかぎり、この過程は全体主義システムにますます近づいていくにちがいない」と述べ、「社会的正義」という言葉を、自由や「大いなる社会（Great Society）を破壊しかねない根深い情緒を支える強力な呪文である」と批判したことなどは、よく知られていることであろう。さらに、彼は、「先祖返りとしての社会的正義」という講演の中で、アフリカの部族社会の平等主義が発展を阻害していると述べた上で、次のように述べている。「われわれの社会に『社会的正義』が与える主たる負の効果は、さらに投資するための資力を奪うことで、本来ならば個人が達成できたはずのことを妨げるという点にある。それはまた生産性の高い文明に馴染まない原理でもある。なぜなら、生産性の高い文明においては、収入がそれぞれ全く不平等に割りふられ、それによって希少な資源がもっとも高い利益を生むところに向けられるからである。」つまり、ハイエクは、生産性上昇に沿った進歩史観を前提に、社会的正義の時代錯誤性を指摘したかったのである。社会的正義は地位が下降傾向にある集団のスローガンにすぎないとして、そこには部分の利益が全体を騙る機制があることを、彼は突こうとするが、そうした彼の議論からは、自生的秩序という全体を騙ることで部分の犠牲を正当化しながら社会的正義という概念からその正当性を剥奪しようとする

意図が透けて見えてくると言ってよいだろう。しかし、ネオリベリズムに基づく現実のガヴァナンスの実態は、社会的正義という概念からその正当性を剥奪するどころか、逆に、概念の訴求力を高めることに寄与することになり、それはグローバル・ジャスティス運動を生み出す社会的環境を用意したとも言える。」

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

①土佐弘之「裏切られた移行期正義：＜インドネシア／東ティモール＞問題の再検証」『法学』76巻6号、2013年、77-110頁。（査読なし）

②土佐弘之「クロノトポスの政治的変容：四千年文明国家と百年国恥地図」『現代思想』2012年12月、59-71頁。（査読なし）

③土佐弘之「野生のデモクラシーについて——新しいアナキズムのグローバル・ポリテイクス——」『国際政治』168号、2012年、131-145頁。（査読なし）

④土佐弘之「メタ・ヒストリーの政治」『新しい歴史学のために』280号、2012年、1-16頁。（査読なし）

⑤土佐弘之「過剰な安全保障装置に抗うデモクラシー 非対称的世界内戦とアラブ革命」『現代思想』2011年9月、194-211頁。（査読なし）

⑥土佐弘之「グローバル・アセンブリッジの中のFTA <根こぎ／根付き>の政治学」『現代思想』2011年6月、52-66頁。（査読なし）

⑦土佐弘之「ハイブリッド・モンスターの政治学 不確実性という活断層」『現代思想』2011年5月、154-163頁。（査読なし）

⑧土佐弘之「比較するまなざしと交差性——ジェンダー主流化政策の波及／阻害をどう見るか——」『日本比較政治学会年報第13号』ミネルヴァ書房、2011年、33-72頁。（査読有）

⑨土佐弘之「非対称的同盟における見ヶめの

政治——ヘゲモニー衰退期における基地問題を中心に」『法律時報増刊 安保改定 50 年』日本評論社、2010 年、212-220 頁。（査読なし）

⑩TOSA Hiroyuki, "Reading Schmitt against Schmitt in the Context of the New Wars Debate," *Journal of International Cooperation Studies* (国際協力論集 [神戸大学大学院国際協力研究科紀要]) Vol. 18(1), 2010, pp. 53-70. (査読なし)

⑪ TOSA Hiroyuki, "Anarchical Governance," *International Political Sociology* 3(4), 2009, pp. 414-430. (査読有)

[学会発表] (計 5 件)

① TOSA Hiroyuki, "Zomia as Method," International Studies Association, San Diego, 2012 年 4 月 1-4 日.

②TOSA Hiroyuki, "Crossing Bio-political Borders through Aesthetic Works: Challenging the Fortress against Asylum Seekers," ISA Annual Convention, Montreal, 2011 年 3 月 16 日-19 日.

③TOSA Hiroyuki, "Bringing 'the part of those who have no part' back in: The Democratic Spectral Politics of the Global Justice Movement," SGIR 7th Conference, Stockholm, 2010 年 9 月 9 日-11 日.

④土佐弘之「比較するまなざしと交差性 ジェンダー主流化政策の波及と障害をどう見るか」日本比較政治学会 2010 年度研究大会、東京外国語大学、2010 年 06 月 19-20 日.

⑤土佐弘之「金融拡大局面の終焉(覇権移行)期における統治性の再編と規制緩和/強化の政治 グローバル・ジャスティス運動を中心に」日本政治学会 2009 年度研究大会、日本大学、2009 年 10 月 10 日.

[図書] (計 11 件)

①土佐弘之(単著)、野生のデモクラシー、青土社、2012、全 355 頁.

②土佐弘之(部分担当執筆)、西谷修編『「復帰」40 年の沖縄と日本』せりか書房、2012 年、146-176 頁.

③土佐弘之(部分担当執筆)、大沢真理編『ジェンダー社会科学の可能性(第 4 巻)』、岩

波書店、2011、67-91

④土佐弘之(部分担当執筆)、杉田敦編『守る(政治の発見⑦ 境界線とセキュリティの政治学)』風行社、2011 年、102-127 頁.

④土佐弘之(部分担当執筆)、菅英輝編『東アジアの歴史摩擦と和解可能性 冷戦後の国際秩序と歴史認識をめぐる諸問題』凱風社、2011 年、94-122 頁.

⑤土佐弘之(部分担当執筆)、齋藤純一編『人権の実現(講座 人権論の再定位 第 5 巻)』法律文化社、2011 年、260-277 頁.

⑥ TOSA Hiroyuki (部分担当執筆) "Securitization of Development and Clinical Gaze upon Poverty: Reconsidering the Political Shift of Development Discourse," in *Paradigms of Security in Asia*. edited by Arpita Basu Roy, (Kolkata [Calcutta]: Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies, 2011), pp. 11-26.

⑦土佐弘之(部分担当執筆)、大越愛子・井桁碧編『現代フェミニズムのエッセックス(戦後・暴力・ジェンダー 第 3 巻)』青弓社、2010 年、264-295 頁.

⑧土佐弘之(部分担当執筆)、長崎暢子・清水耕介編『アフラシア叢書 1 紛争解決: 暴力と非暴力』ミネルヴァ書房、2010 年、24-47 頁.

⑨土佐弘之(部分担当執筆)、伊藤誠・本山美彦編『危機からの脱出』御茶の水書房、2010 年、74-89 頁.

⑩土佐弘之(部分担当執筆)、佐藤幸男・前田幸男編『世界政治を思想する I』国際書院、2009 年、151-178 頁.

⑪土佐弘之(部分担当執筆)、稲田十一編『開発と平和』有斐閣、2009 年、55-74 頁.

[その他]

ホームページ等

下記 URL にて、研究成果の一部を公表している。

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~tosa/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土佐 弘之(TOSA HIROYUKI)

神戸大学・大学院国際協力研究科・教授

研究者番号：70180148

(2) 研究分担者

中山 智香子 (Nakayama Chikako)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授  
研究者番号：10274680

ロニー・アレキサンダー (Ronni Alexander)  
神戸大学・大学院国際協力研究科・教授  
研究者番号：40221006

(3) 連携研究者

なし